

沼津市 志 山 小 記 念 館

第6號

1991.2.5.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11 Tel(0559)62-0424



創作誌友大会

大正三年三月二十八日 清風亭にて

創作誌友大会

この写真は、大正三年三月末に行われた創作社誌友大会のときのものです。その顔ぶれといい時代といい、かなり貴重な資料だと言えます。写真に写っている人々では、つまり名前前の分かるのは十八人、特に金子薫園、太田水穂、尾山篤二郎、齊藤茂吉、古泉千樞、内藤銀策の姿が印象深く、他には牧水を支えた高塩青山、和田山蘭、中村柊花ら後の創作社の有力同人の顔も見え、この誌友大会がどういう趣旨のもとに開かれたのか、色々調べてみたが判然としない。ただ、この月の始めの七日夕方、銀座のカフェ・ヨーロッパという店で、若手の有力歌人八人が集まり晩餐会をやっているの、或いはその時に出た話が実を結び、この大会になったとも考えられる。「創作」四月号編輯便にその夜の牧水を次のように書いています。当日約束の時間は午後五時であったようだ。「私の行った時には誰もまだ来ておらず、二階から下の街路を眺めていたら前田夕暮君がやって来た。休憩室で房州の話などしてゐる所へ、二人見えた。一人は齊藤茂吉君で、一人は中村憲吉君であった。齊藤君には曾つて一度逢つたことがあつたのに忘れていた。中村君とは初めてである。そこへ土岐哀果君が元気のいい顔をして入つて来た。西村陽吉君が見え、古泉千樞君も見え、尾山篤二郎君がコトコトと階段を上つて来た。そこで食堂へ移つたが」という風な書き出しで、文末に「別に意味のある会合では無さ相だが、とにかく面白かつた。今後、も時々催されるであらう」と結んでいる。今にして思えば奇蹟に近い歴史的組み合わせとも見えるのだが、それがこの頃のように商業ベースに乗る訳でもなく、全く無意味に行われているところに、羨むべき時代のどかきさを感じられる。

誌友大会はこの晩餐会の日から三週間経て、三月二十八日から四日間の日程で行われた。「創作」はこの頃まだ総合雑誌風の形態をとっており、売れ行きが落ちて経営も行き詰まっていたらしい。事実この年の年末には雑誌は休刊した位だから、この大会は改革へ向けてのデモンストレーションであったのかもしれない。第一日目は茶話会と帝劇の観劇。二日目は島村抱月、相馬御風等を迎えて講演会があり、夜は懇親会になっている。三日目は小石川植物園と浅草見物、最終日は博覧会と日本橋京橋方面の見物、そして夕方からは小石川三軒町の太田水穂宅に集まってお別れ会、という盛り沢山の内容であった。この写真を見て驚くことは女性が一人も見えないことだ。この時代、歌は男たちの世界のものだった、そう考えてよさそうである。明星派主軸の浪漫主義詩歌の全盛期は、すでに終わって居たけれど、まだこの頃の歌の世界には、若い男達の血をかき立てる熱い夢や理想など、幾らかは残っていたのであろう。(上田治史)

特別寄稿

歌人としての大悟法利雄氏

——主としてその晩年の歌——

白井洋三



触れられる向があるうし、専門でもないので、私は氏の歌人としての側面を、晩年の作品を主に語ってみたいと思う。

氏には『第一歌集』以来、十二冊の歌集と別に自選歌集一冊がありへ一万首近しと思ふわが歌に我ならではといふはいくばく」と歌うごとく、その作歌七十余年の間に膨大な歌数を残されている。その全貌にわたることは到底無理であるので、ここでは最終の二冊、即ち『薔薇と病院』（昭62）『九十歳前後』（平2）について主に触れてみよう。作品としては、昭和六十年から平成二年にかけての六年間、年令八十六歳から九十二歳になんなんとする。

氏は『薔薇と病院』の「巻末に」に記すように「歌は平明であり、美しい声調を持ち、健康でありたい」ということを信条とし、それが牧水の道だとしてきたが、「老い」の自覚と共に、牧水にはまったくない老境の歌に力を入れてみようと思いはじめたという。〈百歳の歌といふをまだきかずわが夢はその百歳の歌〉（『薔薇の散歩』）へわが夢は八十年代九十年代百歳と深みつつ至る自由無碍の歌（『夢と薔薇』）などというのが「老い」の自覚と共に七十代の半ばで歌われたのだった。そして、その頃から自らの「老い」の過程をできるだけ忠実に克明に歌うようになってきている、と記している通り、晩年の歌集はまさにその覚悟で貫かれている。中には「心よりさう思ふことがこの頃は時にあるなり死んだ方がまし」など、そのなまなましい思いがそのままに表出されているのを看過すわけにはいかない。

啄木の葬儀の弔辞係にてその読み方に苦心せる
夢

川端夫妻我等と共に横光の寺に泊る夢樂しかり

大悟法利雄氏の九十二年の生涯において、その主な業績を顧みれば、若山牧水研究の数々が先ず第一に挙げられる。氏自身も「代表作と文学者の碑に刻

まむはやはり『若山牧水伝』にて」と歌われているごとくである。沼津市若山牧水記念館初代館長を勤められた所以でもある。この方面については他に

にき

わが家に泊りて夢の天皇は御機嫌うるはしく語り給ひき

老境の歌の一つの特長として氏には夢の歌が多い(目立ってくるのは第七歌集『夢と薔薇』あたりからである)。夢はやはり老境の証左であることを正直に示しているであろう。歌人やかつてのジャーナリスト時代に親しんだ人が登場するのはともかく、天皇まで現れてくるというのは、まさに夢とは言いながら自由無碍と言うべきなのであろう。

昭和六十二年の春から夏にかけて、私は氏にその生い立ちから最近に至るまでのもろもろを語っていただき、「聞き書き」として雑誌「短歌現代」(昭62・7~11)に連載したのだった。後に氏が故郷大分県中津の「耶馬台」という雑誌に「おかしな自伝」というのを連載され、また「自伝執筆」という四十首の短歌に、その一部が圧縮されて歌われているが、いづれも前記「聞き書き」が発端となつていると思われる。

今にして思へば、「聞き書き」の頃は盟友高橋希人氏の死を悼みつつ、沼津牧水記念館の開館を待ちに待たれていた。そして、それはペースメーカー植えこみの中野総合病院への入院にぶつかる時期でもあった。退院にあたって、「新しく生涯の友となりしなりペースメーカーよ頼むぞ君に」と如何にも氏らしく歌いながら、

わが心臓いつまで保ちてくるるにや開館式はあと四月なる

その悲願かなはぬことも覚悟せる我とは妻も気づきをらむか
などという作品には悲愴感が漂っていた。

君を慕ひ君を尊ぶ沼津びとのま心凝りしこの記念館
天職は詩歌の振興と信じるし君が一生を我のみは知る

呑兵衛といへども初志は貫くとかの日しみじみわれに宣らしき

開館のテープも切りぬ館長の謝辞も述べ来ぬ老いて病みつ

そして、遂に開館式を迎えることのできた喜びが伝わってくる。「呑兵衛」の歌は、牧水が晩年に沼津で発刊した雑誌「詩歌時代」の創刊号が刷り上つた日に、氏を前にしみじみと決意を語つたということである。

後に平成元年「辞任届」の小題で

老いて病み一日勤めしこともなき館長として二年過ぎにき

開館のテープカットに加はりき初代館長の名のみは残らむ

わが椅子はどこにありしや一日だに遂にかけざりし館長の椅子

の歌が残されている。氏の記念館に寄せる思いが、甲憚なく現われているだろう。

歌のほか知らねば老の命かけし精一杯の歌にて候

が最終歌集の最後に近い。遂にして御苑の桜見ざりしが今年の春の悔とならむかも暗示的であると共に、あらためて

妻なれば感謝の心口にするなどわれはつひになかりし

いやはてにその手握りて言ひたきはただ一ことのありがたうにて

と妻への感謝を残して、遂に満九十二歳を目前に旅立たれたのだった。あらかじめ

頑固なる故人の意志とことわりて葬儀告別式行はぬこと

戒名はもつてのほかぞ読経など無信者われに要るはずもなく

わが声の録音流し憶ひ出を語るくらゐの密葬がよき

と「遺言の歌」が残されていた。氷雨の降る寒い日に松戸で密葬が行われた。読経もなく、朗詠とNHKの対談のテープが流されるのを、数少ない参列者が聞くというものであったのが、遺言に相応しかった。



筆者略歴 大正十一年北海道生れ。昭和十五年「創作」入会。編集委員を経て、昭和五十八年「声調」創刊。現在常任編集委員。歌集「渦巻く水」ほか。現代歌人協会会員。

第三回「雑の歌会」のお知らせ

今年も次の要領で「雑の歌会」が開かれます。

日時 平成三年三月三日(日)午後一時三十分より

会場 沼津市若山牧水記念館 会議室

講師 大塚布見子先生(サキクサ短歌会)

参加方法

○作品応募 未発表の自作短歌一首(応募料無料)

○応募と申込の方法

各自葉書に①詠草(一首)②氏名③住所(電話)

④歌会への出席の「有無」、を明記して申込先に

送付。

○応募と申込の締切日 三年二月九日(日)必着

○申込先 沼津市千本郷林一九〇七一一
社団法人沼津牧水会 事務局

新館長に若山旅人氏



選びて坐る

旅人氏は、これまでも、沼津牧水会とは大変縁が深く、碑前祭には常にお顔を出されて、会を盛りあげていただきました。つい先年は、短歌大会の選者として、ゆっくりお話を伺う機会もあり、親しみ深いお人柄に接して感慨の深いものがありました。

牧水記念館の建設に際しましては、その専門的な見地から、種々御尽力をいただきましたし、牧水の各種資料も多く貸与されております。

今回、大悟法利雄氏の逝去に伴い、新館長をお願いすることになりましたが、快く引き受けていただき、館の新しい発展のため、たいへん幸せなことと思っております。

館長就任にあたって

若山 旅人

沼津牧水会理事長からご要請をいただいた沼津市若山牧水記念館館長就任の件は、全く突然のことでしたが、熟慮の結果、受けさせていただくことになりました。それは、心ある沼津の方々の誠意と情熱を基礎にしてついに記念館を完成させた沼津市と沼津牧水会に対する抜きがたい感謝の念から発したものでした。私の現在の実情から非常勤という条件まで許していただいたものです。これからの皆さんの厚いご協力を切に願う次第です。

大悟法利雄館長 逝く

館長の訃報は全く思いがけずもたらされました。昨年十一月二十七日午前九時五十分、共同通信社社会部の藤岡さんからの電話は「貴館館長の大悟法利雄氏が、亡くなられたが、ご遺族等から何か連絡を受けていますか」といった内容でした。当館としては、それまで何等そのようなことは聞いていなかったもので、そう答えましたところ「二十六日午前九時十分入院先の中野総合病院で、心筋梗塞により逝去された」とのお話で、通夜等葬儀関係の予定についても知らせて下さいました。館では、このことを直ちに牧水会理事長に伝えましたが、理事長も初耳であったとのことでした。

二十八日午後二時より葬儀ということなので、急ぎ種々な対応をとり、当日は牧水会と市社会教育課からの代表が参列しましたが、葬儀は故人の強い意志により、まことに質素なものだったそうです。

前掲の白井洋三氏の文中にも遺言の歌のいくつかを紹介されていますが「会葬お礼の挨拶」の文の中にも「また遺言の歌」十首が載せられています。

これもまた故人の意志と香典も供華も一切おことわりのこと

肉親のみの密葬がよし願はくは死亡通知もそのすみでのち

父の子に生れて更に無信仰のわれの最後はこれがふさはむ

代表作と文学者の碑に刻まむはやはり「若山牧水伝」にて

など、その清廉、純粋な人柄を偲ばせる歌です。心より館長のご冥福をお祈りいたします。

沼津：若山牧水記念館の新しい館長に、若山旅人氏が就任されました。若山旅人氏は牧水の長男として、大正二年に長野県に生れ、牧水が沼津に移住した大正九年から、沼津に住まい、県立沼津中学（現東高）を卒業後、横浜国大建築学科へ進まれ、以後、建築関係で活躍されて来ました。

昭和四十七年より、短歌誌「創作」発行に専従、現在、現代歌人協会、日本文芸家協会会員です。

最近作
降る雪は道に消えつつのこりつついつか凝りて積み
始めた

湯にひたりあふのく顔に当る雪耳のあたりに小さき
音する

はらはらと吹き寄る風に窓をあけ空わたり来し声聞
かむとす

若き母子は隣れる団地より出できたり蒲公英の群を